

谷戸の景観を守る環境保全活動の事例

中塚隆雄¹⁾

1. 瀬上の森とは

横浜の南の森と呼ばれる円海山緑地は、横浜に残された最大の緑地であるのみならず、鎌倉、逗子を経て三浦半島へとつながる首都圏の緑の大回廊の一部です。瀬上の森は、その円海山緑地の北端に位置しており、横浜の原風景である谷戸の景観の中にあります。特に森をつらぬいて瀬上沢を流れるいたち川支流の流域約3キロにわたって横浜市域最大規模で自生するホタルは、この森の豊かな生態系のシンボルになっています。またこの森には、横浜では数少ないアカガシの萌芽林などの樹林、草原、ため池、小川、かつては水田であった湿地という多様な環境があり、そこでは希少な野草や野鳥の他、魚やカエルやヘビや昆虫や、といった生きものにぎわいも見られます。

豊かな自然と共に、数多くの文化財が点在していることも瀬上の森の魅力です。瀬上に人が住み始めたのは縄文時代で、現在県立高校になっている高台

からは縄文時代と奈良時代の住居跡が見つかりました。また10数年前に谷戸の入り口部分を横切って建設された都市計画道路の工事の際には、7世紀から9世紀にかけての製鉄遺跡が発掘されましたが、これは精錬遺跡としては神奈川県で唯一のものです。その近くの水辺には、160万年前の貝化石(化学合成群集)の露頭と江戸時代文化文政期の新田開発の水利施設である横堰が同じ場所に並んで見られます。

また、谷戸の上流部の複数の地点から、地層の年代基準となる約170万年前の火山灰層(房総半島でKd38と呼ばれている火山灰層と同じもの)が発見され注目を集めています(写真2)。

これらの点をつなげていくと、水田と薪炭林という典型的な里山の景観の中で、例えば、いたち川の砂鉄と燃料源としての樹林と渡来人の技術に支えられた製鉄の発達などを背景に、この地が古代から鎌倉時代を経て近代に至るまで経済的にも軍事的にも重要な役割を果たしてきたらしい、という郷土の歴史も見えてくるのです。



写真1 新緑の谷戸と谷戸田跡。



写真2 約170万年前の火山灰層。

1) 瀬上の森パートナーシップ

キーワード: 谷戸, 瀬上, ホタル, 生態系, 環境アセスメント

2. 開発計画の浮上と私たちの活動

このような瀬上の森に今から約20年前に民間の開発計画が浮上しました。

事業者による土地の買収が進み、谷戸田や畑の多くは耕作が放棄され、周辺の樹林の手入れも行われなくなりました。一度は、神奈川県が市街化調整区域での開発を認めなかったことにバブルの崩壊も重なり、開発計画はそのまま凍結されたかに見えました。しかし、平成14年に都市計画法が改正され、事業者の提案で市街化調整区域を市街化区域に編入して開発できる可能性がでてきました。これを受けて平成17年3月、横浜市は、3つの条件をつけて開発の誘導（市の説明では、検討手続きの開始であり開発認可ではない）を決定しました。3つの条件とは、開発予定地の半分を緑地として横浜市に寄付すること、2車線で暫定使用中の都市計画道路を事業者の負担で4車線化すること、そしてホテルの生息環境を保護することです。

現在、円海山緑地の大半は民有地ですが、その中には、近郊緑地特別保全地区に指定されたり、地権者との協定で「市民の森」として当面の保全が担保されているところもあります。一方で、瀬上の森のようになんらの保全の網もかかっていないところも残っており、横浜の緑にとっての大きな課題です。日頃この森を散策する市民には、森の保全の網の境界線は見えません。開発が再浮上した現在でも、この森はすべて市有地だと思っている人たちも多いのです。

瀬上の森から歩いて30分足らずという場所に住む私は、平日は会社勤めをしながら、10数年前から週末の時間を使って、これも円海山緑地の一部である横浜自然観察の森や自分の住んでいる街で生きものや環境にかかわるボランティア活動をしています。その一つが、地域の子供たちとの「こどもエコクラブ」の活動です。エコクラブの初夏の行事として瀬上の森で上演しているホテルの生態と観察マナーを啓発する紙芝居の上演も10年を越えました。

そんな私の耳にも聞こえてくる開発のうわさは、生態系や文化財への大きな影響を予感させましたが、開発計画の内容、行政や事業者の考え方、今後のプロセスなどの具体的な話は一般の市民にはほとんど入ってきませんでした。そこで平成17年（2005年）の7月、見知った近隣の住民や環境ボランティア仲間のネ

트워크として「瀬上の森パートナーシップ（SMP）」を設立しました。

SMPの活動はいわゆる「反対運動」ではありません。民有地の開発計画ですから、まずは地権者の意思が尊重されるべきです。一言で言えば、この瀬上の森を健全な形で次の世代に残していくための「市民の情報共有」と「保全への提案」を目的とした環境保全グループと位置づけています。何が事実か、何が大切かということが明らかになれば、良識ある市民は自分で判断し行動できるのではないのでしょうか。行政や事業者も、市民の環境意識が高まり企業の社会的責任の間われる時代において、多くの人々の目のあるところでは合理的な判断や行動をとるであろうことを期待しています。

SMPの具体的な活動内容は下記の通りです。

- (1) 観察会や勉強会やイベントを通じて瀬上の森を学ぶ
- (2) 樹林や野草の調査、湿地の復活など環境保全の作業を行う
- (3) 行政（県、市）や事業者との協議を通して市民の意見を提案する
- (4) ブログやメーリングリストを活用して情報を共有する

活動を始めるにあたって、まず最初に行ったのは、当事者である県、市、事業者との話し合いの場を設け、関係者から聞き取りをして、「何が事実なのか」ということを確認しました。次に生態系や文化財への影響や保全の方法を理解するために、専門家の方々から助言をいただいたり、時には観察会の講師にお招きし、深く掘り下げるべきテーマについては、勉強会やシンポジウムを開催しています。野草や巨木については自ら調査活動を行い、乾燥化の進む谷戸田跡の湿地を復活する作業にも汗を流しています。そして、収集した情報は、原則としてブログ等で広く公開するとともに、保全の提案の基礎資料としています。

そして私たちのこのような活動は平成19年度の横浜市環境保全活動助成金の対象にもなっています。

3. 開発計画の内容と問題点

このような活動を通じて、この開発計画の内容と環境保全上の問題点がいくつか明らかとなってきました。それは、次のようなことです。

- (1) 造成面積は21ヘクタール(横浜スタジアム7~8個分)もの規模で谷戸の山を崩し谷を埋め、商業施設や住宅を建設する。
- (2) 横浜市が民有緑地の保全の優先度を定める調査事業(緑地資源の総点検)においてAAという最高レベルの評価を受けた樹林の中心部が消滅し、ホタルの自生する河川は埋め立てられ、新たに人工水路につけ直される。
- (3) 開発にあたっては、横浜市が、事業者による都市計画道路の拡幅や緑地の寄付を求めるという公共事業性の高いものである。一方でホタルの生息環境の保護も求める、という難しい条件を抱えた計画でもある。
- (4) 横浜市の都市計画マスタープランにおいて保全対象と表記されている部分まで大きく造成する計画で、マスタープランとの整合性を欠いていると考えられる。
- (5) 約20年前の環境アセスメントを有効として、新たに環境アセスメントを行う予定がない。

ちなみに、地学に関心を持っておられる方々が懸念されるであろう160万年前の海底での化学合成群集(貝化石)の露頭も、当初の開発図面においては完全に破壊されて住宅用地になる計画でした。化学合成群集とは、海底の湧き水に含まれる硫化水素をバクテリアが有機物に変換し、その栄養に依存して生きる生きもの達です。ここではバクテリアを体内に共生させる貝の化石が高い密度で発見されています。光合成とは違った生態系で、この露頭は横浜国立大学での研究が続いていますが、一般の市民が身近に見られるのは世界でここだけとされています(写真3)。

会の発足から約2年、多くの方々のご理解やご支援をいただきながら、また関係する自然保護団体との連携もはかりながら、横浜市長への要望の他、横浜市や事業者との協議を重ねてきました。

その結果として、具体的な成果も見えつつあります。例えば、

- (1) 環境アセスメントの再実施が決まり平成18年(2006年)の2月からアセス審査のプロセスが始まりました。
- (2) 埋め立て後に新たに掘削される水路の幅が広がり、水辺環境を工夫する余地が生まれましたが、一方で造成される樹林の面積は広がりまし



写真3 化学合成群集の貝化石。

た。

- (3) 貝化石の露頭と横堰は完全な破壊を免れ、今後文化財として登録する方向で検討の進むことが期待されています。
- (4) 耕作放棄された谷戸田の一部を湿地(谷戸田)として復元するイメージが計画図面に盛り込まれました。

特に環境アセスメントの再実施は、市民にとっては、開発計画と環境保全措置の内容が公開され市民の意見を反映するプロセスになり得ますし、行政や事業者にとっては、都市計画の変更を検討するとすればその説明責任を果たす場の一つであることから、私たちが最も力を入れたテーマの一つです。

一方で、アセスの効果ではありますが計画の内容が明らかになるにつれて、新たな問題が出てきたり、環境保全の裏づけのなさが浮き上がってくるものもありました。

- (1) ホタルの繁殖に影響の大きな光の害への対策に具体性や裏づけがない
- (2) 薪炭林や湿地といった生きもの環境である地域特性への配慮がなく、保全措置が限定的である
- (3) 湿地や雑木林の管理の主体が見えず、市民による保全活動との関係も不明確で、生き物の生息・生育環境の維持が担保できない
- (4) 製鉄遺跡などの文化財の保全や活用まで配慮が及んでいない
- (5) その他に、商業施設や住宅が計画されている

ので、車が増えて交差点の処理能力を超える大きな交通渋滞が発生したり、静かな住宅街を通り駅に向かう歩道ができ通行する人が激増する、というような生活環境への影響の発生。

また、当初は緑地や生きものについての関心から始まった活動ですが、貝化石や文化財の保全についてご相談した研究者の方々とのご縁で、第四紀学会の方々との交流も生まれ、ランドスケープとしての谷戸の成り立ちという視点がもう一つの保全対象として注目されることになりました。貝化石や火山灰という、なんでもない崖の土の中にも新たな谷戸の物語が見えてきたというわけです。

4. これからの活動の方向性

私たちは、自ら求めた環境アセスメントの再実施をしっかりと生かすため、その手続きに市民として積極的に参画すると共に、アセスの後に予定される都市計画変更の審議で、本当に谷戸の景観が保全できるのか、生態系や文化財への影響を回避、低減できるのか、ということを確認していかなければなりません。

この原稿を書いている時点(2007年7月)では、アセスの最終段階である「評価書」の縦覧が終わり意見書を提出し終わったところです。

その意味で、私たちの活動は、まだ報告という形でお話できる状況にはありませんので、あくまでも「ing(現在進行形)」の事例としてご理解下さい。

現在、私たちにとっての活動上のテーマと方向性は次の通りです。

- (1) 瀬上の生態系や文化財の保全を実効あるものにするためには、これまでの観察会・勉強会、あるいは野草の調査や湿地の維持管理というようなフィールドに根づいた市民による保全活動をもっと広げることが重要だと考えています。
- (2) 景観を守るには、そのフィールドの特性とそれを構成する要素をつなぐストーリーが必要です。つまりホテルだけ、野草だけ、貝化石の露頭だけを守るのではなく、守りたいのは、人のくらしと関わりを持った「谷戸の景観」であるということをもっと明確にしていきます。
- (3) その手段として、私たちが目標としているのが、耕作放棄された谷戸田を市民の手で復活することです。これは単なる米作りではなく、適度な攪

乱の生じる湿地や水路や樹林の環境を維持して生きものたちの生息の場を守ることであり、その活動を通して水利や治水の重要性と谷戸にくらしてきた先人の生活や知恵も学ぶことができるはずです。

- (4) 現在も瀬上ではいくつかの市民のグループが雑木林の管理やホテルの調査、水辺の清掃や管理などの環境保全活動に関わっています。その中で私たちは、生きものつながりである生態系とそれに関わる人のくらしや文化財までを含めた「谷戸の景観」を守る活動の横糸を紡ぐ役割を果たしたいと考えています。
- (5) 私たちは「点から線」「線から面」への広がりビジョンを「瀬上、谷戸のくらし野外ミュージアム構想」という形でまとめ、2007年3月にはシンポジウムを開催して将来の谷戸の保全の方向性を市民の方々と確認しました。
- (6) ビジョンの実現のためには、現在進行中の環境アセスメントはもとよりのこと、今後の都市計画の審議などの場でも行政や事業者に働きかけを行うと共に、市民と行政と地権者(事業者)のパートナーシップによる具体的で裏づけのある保全措置をはかっていかななくてはなりません。
- (7) そして何よりも、この谷戸の景観を保全する日常的な活動に参加する人たちを増やし、保全を実効あるものとしていかななくてはならないと考えています。

瀬上に「谷戸のくらし野外ミュージアム」が実現するまで、まだまだ長い道ではありますが、これからも合理性と透明性をもって、穏やかに、粘り強く、そして何よりも楽しく活動を続けていきたいと考えています。また横浜市は、平成19年度(2007年度)の環境保全活動助成金の交付対象団体の一つとして私達、瀬上の森パートナーシップを選びました。これも行政とのパートナーシップのはじめの一歩として、今後の保全活動に生かしていきたいと考えています。

5. 最後に

途中経過でしかない私達の活動報告に取ってまともをつけるのであれば、開発計画に市民が提案をしていくにあたって、「そのフィールドでの日々の活動を通して地域の特性を理解し、そこでは何が大事かとい

うことを明らかにする」「生きものだけ、文化財だけでなく、多面的にフィールドを捉える」ということの重要性を改めて強調したいと思います。

特に、地質や地形が生態系を支える基本であることやその重要性は言うまでもありませんが、現実には、生きものや生態系に関心を持つ人たちはいても、同時に文化財や地質・地層にまで興味を持ってフィールドを語る、ということは少ないのではないのでしょうか。私たちはそのような人材を「トコロジスト」と呼びたいと思いますが、トコロジストが育つにはまだまだ分野間の相互交流が必要なようです。

露頭を守る、ホテルを守る、ということだけではなく、露頭もホテルも樹林もセットで保全を考えるストーリーを意識しながら、フィールドの本当の価値をみんなで共有できる活動をしていきたいと考えています。

その意味で、第四紀学会が発足時より学際的なアプローチを重視してきておられるということの先見性

は評価されるべきですし、その重要性はこれから益々大きくなっていくのではないかと思います。

私達の活動については、下記のホームページをご覧ください。

瀬上の森パートナーシップ

URL : <http://ameblo.jp/segami-ps/>

瀬上、谷戸のくらし野外ミュージアム

URL : <http://www.segami-museum.net/>

またご意見がありましたら、下記のメールアドレスまでお寄せください。

e-mail : segami-ps@hotmail.co.jp

NAKATSUKA Takao (2007) : A volunteer activity for the environmental protection of the rural forest in Yokohama.

<受付：2007年9月12日>